

## 近世における御書関係書籍の出版事情概観

堀部 正 円

### 一、近世の出版文化史上に位置づけられる御書

日本における印刷文化は、天平宝字八（七六四）年に称徳天皇が供養のために制作した『百万塔陀羅尼』に始まる。以後、仏像の胎内納入のために印刷された印仏・摺仏が伝わるなど、日本における印刷文化の担い手は寺院であった。すなわち、奈良時代から中世に至る間、多くの本が出版されたが、それぞれ出版地の名称などを取った、高野版、春日版、叡山版、浄土教版、五山版などが伝わる。これら中世までに出版された本は古版本と総称されている。古版本が寺院において印刷・出版されたのは、僧侶の研鑽による需要に基づいている。また、古版本の特徴として、すべて整版本であったことが挙げられよう。整版とは、彫刻された板木を原版とし、その一面に墨を塗り、上から用紙をあて馬棟で擦って印刷されたものをいう〔竹下〕。

戦国時代を経て豊臣秀吉が朝鮮に出兵した折、大陸より印刷文化を持ちかえたことで、我が国に活字文化が栄えたといわれる〔小秋元〕。活字版とは、文字を一文字もしくは複数の文字を木に彫刻もしくは銅で鑄造した活字を用いて印刷されたものをいう。特に、文祿（一五九三〜九六）・慶長（一五九六〜一六一五）・元和（一六一五〜二四）・寛永（二六二四〜四五）・正保（一六四五〜四八）・慶安（二六四八〜五二）の約五十年間に活字で印刷・出版された本を、以後継続的に出版される活字版と時的な上で区別をして古活字版と呼んでいる。古活字版は、書肆による出版、すなわち町版もあるが、多くは天皇や寺院のほか、権力者や医師・学者などと

いった知識人による出版が多い。朝鮮からの活字文化の移入と時を同じくして、キリスト教徒も活字文化を輸入してキリシタン版を出版しており、中には古活字版の起源をキリシタン版に求める研究者もいる〔佐々木〕。

一方、整版は『百万塔陀羅尼』（七七〇年）以後、戦国時代までの長きにわたり用いられた。古活字版の出版により、整版は一時に少なくなつた。しかし、活字は一度版を組み、ある程度印刷をすると版を崩してしまうため、大量出版には向かない技法であつた。次第に書物への受容が拡大した世情に合わせ、本の出版は商業化される。古活字版は、その印刷過程から商業的な供給には絶えられず、再び整版が主流となり、近世の出版文化を支えたのである。

以上のような、出版文化史上に日蓮宗関係書籍を当てはめると、次のようにいえるだろう。

日蓮宗関係書籍は、古版本の一角を担うことはなかつた。豊臣秀吉による朝鮮からの活字技術の流入によつて盛んとなつた活字文化は、日蓮宗寺院においていち早く用いられた。特に、この時代の古活字版による出版として、本国寺版・要法寺版・本能寺版・下総檀林版などの寺院版が知られている。川瀬一馬氏によると、文化人である本阿弥光悦や朝鮮出兵に直接関わつた加藤清正と日蓮宗の関わりを指摘し、早い段階での技術移入があつたと指摘する〔川瀬〕。その後、町版が台頭し、古活字版から整版に移行した後も、日蓮宗関係書籍は引き続き出版された。とりわけ、村上勘兵衛ほか四書肆による法華宗門書堂の設立により、さらなる盛んな出版活動が見られる〔冠①〕。

日蓮聖人の遺文（以下「御書」と呼称する）も、こうした出版文化史からみたととき、重要な位置にあると言つても過言ではない。すなわち、『録内御書』が古活字版で少なくとも三種類出版されたことが判明しているからである。『録内御書』の古活字版は、出版文化史の中でそれ程積極的に言及されているわけではなかつたが、目録を含めた四十一冊もの膨大な冊数を、それも三度出版したことは、他の本に比べて極めて積極的な出版と見るべきであり、もっと出版文化史の中で注目されるべきである。

続いて、整版の時期に至るも、寛永後期というこれも商業出版としては早期のうちに、二種類の『録内御書』が出版されており、以後継続的に出版された。また、『録外御書』も寛文二年に出版以後、継続的な出版が確認されている。したがって、出版文

化史上にあつて、御書は多種多数のものが出版されているのである。御書の伝承について、中世は写本の時代、近世は刊本の時代と言われる所以はこうした歴史にある。

本稿では、近世日蓮門下において出版文化とともに展開した御書の出版事情について、書誌学の手法に基づいて概観、考察したい。

## 二、近世における御書の出版

御書は、『録内御書』と『録外御書』に分割される。日蓮聖人滅後およそ一二〇年頃に『録内御書』が収集されたといい、いくつか成立事情の検討も行われているが、断定できるまでにはいたっておらず、成立経緯は明らかになっていない。『録内御書』の編纂で漏れた御書は、『録外御書』として一括された。

本項では、『録内御書』『録外御書』の近世における出版事情について概観する。

### ア、『録内御書』

『録内御書』は、現在古活字版が少なくとも三種出版されたことが確認される。すなわち、A・A・B本の二種三版である。AとBは活字の種類で分別されており、Aの活字で二回版を作つて印刷されたということである。

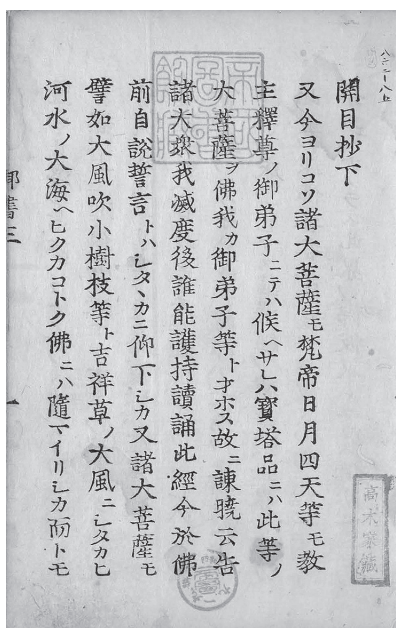
B本については、冠賢一氏が真迢『破邪顕正記』の指摘より、同一本文という点から本国寺版と指摘する〔冠①〕。また、池田令道氏が本満寺本と日重本とB本の本文の近似性から本国寺版と指摘する〔池田〕。さらに、筆者も法忍寺妙義文庫に所蔵するB本の表紙裏張りから、本国寺版『天台法華疏義續』『法華文句随問記』『大乘止観法門宗円記』の刷り破れが発見されたことから、本国寺版の可能性が高いことを指摘した。以上は、B本が本国寺版の活字と同一であるというような確実に本国寺から出版され

たという断定的証拠が挙げられてはいえず、状況証拠の集まりではある。とはいえ、これほど多くの状況証拠が揃っており、B本は本国寺版の可能性が極めて高いと考えられる〔堀部④〕。ただし、観妙日存の『金山抄』には本国寺と久左衛門という書肆の関わりの中で『録内御書』の出版を述べており、さらなる検討が必要でもある〔堀部⑤〕。

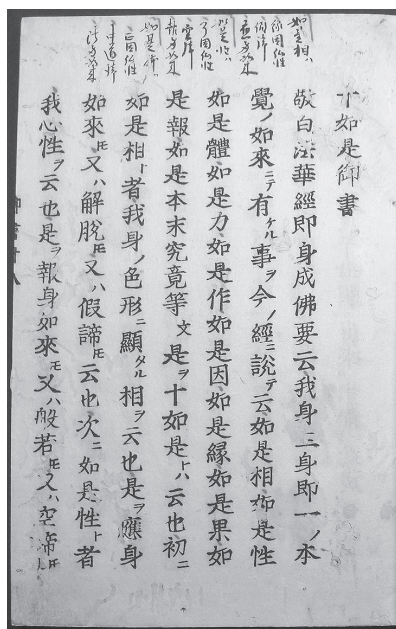
一方、A種本については、冠氏は本国寺版といい、池田氏は寺院版とするが、双方ともその確定的証拠がない。日蓮宗関係書籍の古活字版は、例えば日澄の『日出台隠記』などの町版もあり（庄右衛門版、大谷大学図書館蔵）、筆者は両氏のような断言は出来ないと考えている〔堀部④〕。

筆者の調査では、A本は一一冊、A本は一六冊、B本は九三冊の現存を確認している。なお、古活字版『録内御書』の諸版の【図版】を一〇三として、参考までに掲示した。

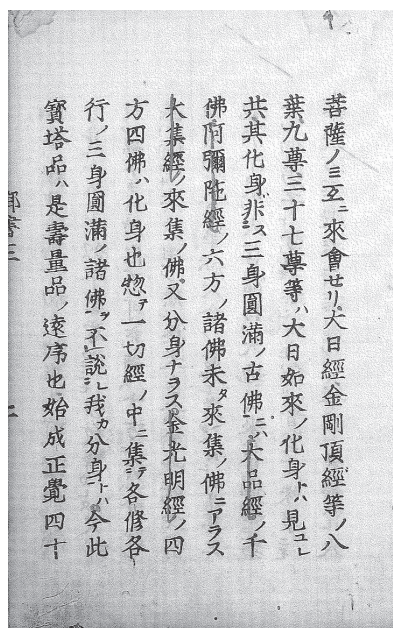
世上で古活字版から整版に変わる時期、『録内御書』も整版が同時期に二種類出版される。すなわち、寛永十九年版と寛永二十年版である。双方ともに、古活字版A本を版下作成の底本として用いた、いわゆる古活字版A本の覆刻整版である。したがって、



【図版1】古活字版B本  
巻3-1丁才  
国立国会図書館蔵



【図版2】古活字版A本  
巻28-1丁才  
法忍寺妙義文庫蔵



【図版3】古活字版A本

卷3-2丁才

立正大学図書館蔵

【図版の二次使用はご遠慮願います】

一瞥すると寛永両版は同一のようにも見えるが、詳しく対照するとそれぞれの特徴において相違が明らかとなる。例えば、寛永十九年版では、目録に御書の識別番号ともいべき番號バツダがあるが、寛永二十年版では、この番號が目録には一切見られない。また、寛永十九年版では、『観心本尊抄』の巻末にのみ校合した本が記される一方で、寛永二十年版では、『観心本尊抄』を含め二十四編の御書に校合本が記される。すなわち、「以御正本校之畢」や「以正中山御真筆得於日通師写之本校合畢」などと註記されており、真蹟及び日通の真蹟対校本と校合したとある。このほか、漢文体の御書については、寛永十九年版では白文になっている御書が多いが、寛永二十年版になるとほぼ返り点が付される冠②。このように、同一の底本による覆刻整版でありながら、いくつもの相違が見られる。

寛永十九年版及び寛永二十年版は、それぞれ後継の本が出版された。

寛永十九年版は、同本の覆刻版が出版された。筆者が版面などの対照を行い、新発見として報告した版種である。覆刻版とは、「既刊本を底本として、その版式通りに模して版木を作り、出版した本」を意味する富士。すなわち、版木を改めて出版してい

る。寛永十九年版では白文の御書が多く、出版に当たって対校した本が明記されるのは『観心本尊抄』のみであることや、番號があるという特徴を述べたが、覆刻版ではこうした特徴とは真逆の特徴を持つ。すなわち、寛永十九年版と覆刻版、そして寛永二十年版の三種を比較対照すると、覆刻版は版式が寛永十九年版に酷似しつつも、内容的特徴（漢文に返り点送り仮名がある、対校本が記される、番號が割愛される、など）は明らかに寛永二十年版に準じている。寛永十九年版と二十年版は出版にわずか八ヶ月間ほどの差でしかなく、この期間に目録を含めて四十一冊もの本を作成することは不可能である。まして、内容的には明らかに寛永二十年版に酷似しており、したがって、寛永十九年版の覆刻版は、寛永二十年版が出版された後、同版を模倣して作成・出版されたものと断言できる。この寛永十九年版の覆刻版は、書誌学的名称に基づき「覆寛永十九年版」と名付け、これまで何点かの論文を発表して、その特徴を明示してきた（堀部①、など）。

寛永二十年版は、寛文九年に法華宗門書堂によって再度出版された。寛文九年版は、寛永二十年版の後印本であり、両版での差異は管見に入っている限りで巻四十の刊記部分のみである。その後、宝暦六年版が出版されるが、本版は巻一の内題『立正安国論』の下に「寶曆修補本」とある。すなわち、寛永二十年版・寛文九年版から多少の変更が見られる。その変更は、単に版木が摩耗した補刻だけでなく、表記内容に変更もみられる。さらには入木のほか、一部版木を改めた部分も確認される。

このように、古活字版A本の覆刻整版として出版された寛永両版は、それぞれ後継本があり、二系統の整版本が出版されたのである。それを、それぞれ寛永十九年版系（寛永十九年版・覆寛永十九年版）、寛永二十年版系（寛永二十年版・寛文九年版・宝暦六年版）と名付けた。これら整版本はすべて町版である。すなわち、寛永十九年版は中嶋四郎左衛門、寛永二十年版は庄右衛門、寛文九年版は四書肆による法華宗門書堂、宝暦六年版は村上勘兵衛である（途中、著屋宗八に版権が移る時期がある）。なお、覆寛永十九年版は巻四十が複数現存するものの刊記は存在せず、出版書肆は判然としない。恐らくは現在で言うところの海賊版の類いであつたと思われる、刊記が存在しないのだろう。勇猛院日麿の『祖書編集考』によると、「勘左衛門版」という版の存在を伝えているが、この本の可能性も否定できないが、確証もないため、さらなる検討が待たれる。



宝寺録外』や『本満寺録外』などいくつかの種類が伝承されるが、これらの出版はない。こうした御書の出版事情から考えたとき、近世において『録内御書』が重視されていたことを物語っていると見えるだろう。

ウ、その他

このほか、特記しておきたい御書の出版としていくつか挙げておく。

まず、古活字版『録内御書』に先行する御書の出版として、慶長年間に五大部ほか数冊の御書の出版があった。本書は、出版された時期から慶長本とか、出版冊数から百部刷本などと呼称される。久成日相の『御書用語式』には、慶長本の出版に関わる詳細な事情が記される。それによると、身延山にて出版され、印板が身延山にあったという。日相の当時、既に同本は現存せず、かろうじて確認の取れたものを借用して、本文の対照をしたという〔堀部②〕。後に深見要言が「本化高祖御書」と称する五大部を中心とした本を出版したが、これも慶長本をベースに翻刻されている。近年、慶長本のうちの一冊「観心本尊抄」が発見され、影印版が公開された〔日教研紀要〕。

『録内御書』四十一冊、『録外御書』二十五冊が出版された後、これらに収録される個別の御書が単発で出版された。また、五大部ほか数抄の書き下し御書も出版された。

### 三、近世の御書関連書籍の出版

近世に出版された複数の『書籍目録』には、日蓮宗を「當宗」と呼称している。他宗が固有名詞で挙げられている中で「當宗」という呼称は、明らかに他宗に比べて主体的である。法華宗門書堂・村上勘兵衛と何らかの関わりが考えられるのかもしれないが、この主体的名称と相まって、日蓮宗関係書籍の出版は隆盛を極めたと言っても過言ではない。



その中で、御書の出版に限って述べると、前項の通り近世では『録内御書』『録外御書』をはじめ、御書の本文、すなわちテキストは数多くの出版が知られる。この他の御書に関する書籍の出版として注目すべきは、抄録された要文集と呼称される御書集が挙げられる。日雅の編集した『品類御書』は、寛永五年に出版された古活字版が現存しており（龍谷大学図書館蔵）、以後整版も出版された。日性撰の『御書要文集』も出版されるが、果たして円智日性撰として良いのかは疑問が残る（堀部⑦）。また、日健等撰の『御書抄』や日修・日性撰の『御書註』、日講の『録内啓蒙』といった御書の注釈書、日諦の『御書目次』は、御書の名称を編年体で列記した目次で、こうした御書関係書籍が近世において多数出版された。

これら近世に出版された御書関連の書籍を録内、録外、要文、注釈、目次に分類して列記すると、【資料2】のようになる。この分類に着目して、年代順に見てみたい。まず、近世初期はテキストや注釈書、要文集が出版された。そして、後期になると目次の出版が見られる。これは、初期では録内・録外の区別が主体的に考えられていたが、時代が下がると、次第に成立順、すなわち編年体に並べられるようになったことが、【資料2】の表によって判明するのである。

この他、いくつか指摘しておく、刊年不明の本の中で、録外の『十王讚歎抄』が中村五兵衛によって出版されたことが指摘されているが（松岡）、中村は近世の早い時期に活躍した書肆であり、出版年次の表記はないものの早い時期から出版されていたことが判明するのであり、興味深い事例といえる。

深見要言（生没年不詳）の編著が多数出版されたことも興味深い。深見は五大部をはじめとするテキストの出版をしただけでなく、要文集や注釈書も出版した。

【資料2】を一瞥したとき、個別御書の注釈書はそれ程多くはないが、その中でも『立正安国論』の注釈書が多く出版されたようである。それ程、近世では重視されていたのであろう。

## 【資料2】御書に関する書籍の出版一覧

No.	出版年	西暦	題名	巻数	編著者	活字整版	種類	備考
1	慶長年間		御書五大部	5		整版	録内(個)	整版は『和語式』の情報
2			録内御書	41		古活	録内(全)	
3			録内御書	41		古活	録内(全)	
4			録内御書	41		古活	録内(全)	
5	寛永5	1628	御書要文集	5		古活	要文	品類御書
6	寛永19	1642	録内御書	41		整版	録内(全)	
7	寛永20	1643	録内御書	41		整版	録内(全)	
8	寛永21	1644	御書註	18	日性等	整版	注釈	
9	正保4	1647	品類御書	6	日雅	整版	注釈	
10	正保5	1648	御書音義	2		整版	注釈	
11	慶安2	1649	他受用御書	8		整版	録外	
12	承応3	1654	御義口伝	2		整版	録外	
13	明暦4	1658	御書鈔	25	日健等	整版	注釈	
14	万治2	1659	録内御書条箇	2		整版	注釈	
15	万治3	1660	日蓮大聖人十一通之回状	1		整版	録外	
16	寛文2	1662	録外御書	26		整版	録外	
17	寛文5	1665	立正安国論私記	2	日遠	整版	注釈	
18	寛文9	1669	録内御書	41		整版	録内(全)	寛永20年版の再版
19	寛文9	1669	録外御書	26		整版	録外	寛文2年版の再版
20	寛文9	1669	開目抄講談	2	日禘	整版	注釈	
21	寛文9	1669	御書鈔	25	日健等	整版	注釈	明暦4年版の再版
22	寛文9	1669	御書註	18	日性等	整版	注釈	寛永21年版の再版
23	寛文9	1669	他受用御書	8		整版	録外	慶安2年版の再版
24	延宝7	1679	御書科文	4		整版	注釈	録内御書分
25	延宝8	1680	御書見聞	17	日朝	整版	注釈	
26	延宝8	1680	観心本尊抄私見聞	1	日常	整版	注釈	
27	延宝9	1681	御書和語式	5	日相	整版	注釈	
28	天和元	1681	早勝問答	1		整版	録外	
29	貞享3	1686	録内外類聚	2		整版	注釈	
30	元禄元	1688	御書拾遺和語記	2	日性	整版	注釈	
31	正徳3	1713	録内啓蒙	36	日講	整版	注釈	
32	正徳6	1716	崑玉提要集	2	日重	整版	要文	

No.	出版年	西暦	題名	巻数	編著者	活字整版	種類	備考
33	享保6	1721	御義口伝	2		整版	録外	
34	享保13	1728	録内扶老	15	日好	整版	注釈	
35	享保17	1732	録内拾遺	8	日好	整版	注釈	
36	寛延4	1751	御義口伝	2		整版	録外	
37	宝暦6	1756	録内御書	41		整版	録内(全)	
38	宝暦6	1756	録外御書	26		整版	録外	
39	宝暦12	1762	立正安国論	1		整版	録内(個)	
40	安永8	1779	祖書目次	1	日諦	整版	目次	
41	享和2	1802	祖書綱要刪略	7	日導・日寿	整版	注釈	
42	文化5	1808	御書五大部	14	深見要言	整版	録内(個)	
43	文化5	1808	高祖御書略	3	深見要言	整版	要文	
44	文化5	1808	立正安国論説義	2	深見要言	整版	注釈	
45	文政11	1828	録内御書目録	1	深見要言	整版	目次	
46	天保3	1832	祖書肝要集	3		整版	要文	
47	天保4	1833	身延山御抄	1		整版	録内(個)	
48	天保4	1833	立正安国論、ほか	7カ		整版	録内(個)	書き下し版
49	天保5	1834	立正安国論	1		整版	録内(個)	
50	天保8	1837	崑玉提要集	2	日重	整版	要文	正徳6年版の再版
51	天保13	1842	祖書続集	3		整版	録外	
52	弘化3	1846	祖書目次	1	日諦	整版	目次	弘化改刻・日英
53	嘉永7	1854	立正安国論	1		整版	録内(個)	
54	慶応元	1865	高祖遺文録	30	小川泰堂	整版		
55	刊年不明		祖書編輯考	1	日麿	整版	編纂史	
56	刊年不明		御書要文	2	日性	整版	要文	中村五兵衛版
57	刊年不明		御書要文集	6	日雅	整版	要文	品類御書
58	刊年不明		身延山記	1		整版	要文	
59	刊年不明		十王讚歎抄	1		整版	録外	中村五兵衛版あり(松岡)
60	刊年不明		立正安国論新註	3	日英	整版	注釈	
61	刊年不明		法華初心成佛抄	1		整版	録内(個)	
62	刊年不明		法華六部書	7		整版	録内(個)	天保四年版の後印か
63	刊年不明		録外微考	2	日好	整版	注釈	

## 四、『録内御書』の本文の問題

仏教学研究、すなわち思想研究を主体とする分野では、テキストを読んで解釈をする。したがって、テキストは思想研究にとつて必須のアイテムと言え、最も重要な研究素材といえる。ところが、このテキストも、収録される書籍によって若干の相違があることを知らなければならない。現在では、テキストをデータとして入力し、全く同じものを共有することができる。ところが、アナログ時代であった頃は、多少のずれが生じた。コピー機が出現する以前は、手で書き写したのであり、人間の行為には多少なりとも誤りが生じたことは否めない。まして、近世以前のくずし字を用いていた時代は、誤読が生じ、誤読されたものが転写されることでさらに文章に変更が加えられたのである。したがって、古い写本や刊本には多少なりともテキストに相違が見られるのであり、各分野の文献は専門家によって地道に本文異同の有り様が調査、報告されている現実がある。こうした、諸本を比較対照して異同を検討し、原典に最も近い形を追求する学問を校勘学といい、書誌学研究の一翼を担っている。

御書の伝承が、中世写本、近世刊本であったことは前述の通りだが、テキストとしての御書が伝承の過程で変化を生じ、諸本によって異同が存在するのである。真蹟現存の場合、現代では写真版として公開されており、真実の文字を追求することができ、写本の伝承によるものは、相違が見られたときに真実を追究することは困難を極めるとも言え、宗学・宗史学のみならず、国語学、歴史学など、様々な分野の視点からテキストの追究が検討されている事情もある。

本稿では、諸本によって本文異同が見られる様子を、刊本『録内御書』の諸本に求めたい。とりわけ、各本の表記の特徴を明らかにしたい。既に、『録内御書』の諸本において文章が相違する様子は、久成日相の『御書用語式』において行われている。本書は、『録内御書』の校勘学を追求した典型的な書物として指摘でき、筆者は以前にこの点について紹介・考察を試みた(堀部⑦)。日相の『御書用語式』も参考にしながら、『録内御書』の表記の相違を示してみる。なお、以下本文の引用中に引かれた傍線は表記の相違を、また波線は漢文の配置の相違を、それぞれ筆者が便宜上付加したものである。

ア、古活字版諸本の本文異同

二種三版の古活字版は、各本の現存が稀少であり、対照が容易でない。その数少ない中から確認できた諸本より本文異同を明示して、各版の特徴を明らかにする。

まず、A本とB本の比較である。卷十六の『兄弟抄』で確認する。A本は東洋文庫所蔵本、B本は国立国会図書館所蔵本による。

〈A本〉三世ノ諸佛ハ此經ヲ爲テ師ト成リ正覺ヲ十方ノ佛陀ハ一乗ヲ爲テ眼目ト引導シテ衆生ヲ今現ニ入テ經藏ニ見ニ是ヨリ後漢ノ永平至テ唐ノ末ニ所渡レル一切經論有リ二本所謂ル舊譯ノ經ハ五千四十八卷也新譯ノ經ハ七千三百九十九卷也(二丁オ)

〈B本〉三世ノ諸佛ハ此經ヲ師トシテ正覺ヲ成リ十方ノ佛陀ハ一乗ヲ眼目トシテ衆生ヲ引導シ給テ今現ニ經藏ニ入テ此見ニ後漢ノ永平至テ唐ノ末ニ所渡レル一切經論ニ本アリ所謂舊譯ノ經ハ五千四十八卷也新譯ノ經ハ七千三百九十九卷也(二丁オ)

文章の相違は送り仮名の有無程度であり、内容に関わるものはない。ただ、漢文の表記が大いに異なる。B本の場合、読む順次通りに並んでいるのとは対照的に、A本の場合は返り点を付して読むような漢文体となっている。このような相違は、全体的に見られる。

次に、A本とB本を比較する。卷二十六の『一昨日御書』で確認する。A本は大谷大学図書館所蔵本、B本は東洋文庫所蔵本による。

〈A本〉早廻 賢慮ヲ須ケテ退異敵ヲ安シ世ヲ安スルヲ國為忠ト為孝ト文ニ為ニ身ノ不述之為君ノ為佛ノ為神ノ為ニ一切衆生ノ所令言上也恐恐謹言 謹言 文永八年九月十二日 異本八月二十一日日蓮 在御判 (十一丁オ)

〈B本〉早廻 賢慮ヲ須ケテ退異敵ヲ安シ世ヲ安スルヲ國為忠ト為孝ト文ニ為ニ身ノ不迷之為君ノ為佛ノ為神ノ為ニ一切衆生所令言上也恐恐謹言 文永八年九月十二日 日蓮 在御判 八月二十二日 (十一丁オ)

A本に多くの傍線が見られるのは、B本よりも送り仮名が多いことによる。一カ所「述」と「迷」の相違があるが、これは字

形が似ていることから、恐らく採字ミスによるものと推測される。古活字版にはよくあるミスである。A・B両本の比較と対照的なのは、波線が一切見られないことである。A本とB本では、漢文の並びが酷似しており、また全体的にも表記の相違がそれほど多く見られない。その点で、A・B両本の比較とは対照的な結果が現れる。

続いて、A本とA'本の比較である。卷十五の『法蓮抄』で確認する。A本は東洋文庫所蔵本、A'本は佼成図書館所蔵本による。

〈A本〉此國ヲ如何ニ諫ムレ共不レハ用結句ハ入テ人身ニ令メ自界叛逆自リ他國可責也 (三十二丁オ)

〈A'本〉此國ヲイカニ諫ムレトモ不レハ用結句ハ入テ人身ニ自界叛逆セシメ他國ヨリ責ヘキ也 (二十九丁オ)

一文の引用だが、漢文の並びの相違が見られる。このような相違は、両本を比較すると非常に多い。前述のように、古活字版をAとBで種別しているのは、活字の種類を分類したものである。活字が同じという点は、同一の場所で出版された可能性が高いと考える。ところが、古活字版『録内御書』の場合、A種本では表記の相違が多く、底本が異なることは否めない。この点をどのように考えるべきなのか、現状では不明と言わざるを得ない〔堀部⑥〕。

一方、A'本とB本には極めて似た表記となっている。古活字版各本の本文異同から、A種本については出版に携わった寺院、人物、もしくは書肆については、未だ謎に包まれているといえる。

#### イ、整版諸本の本文異同

次に、整版の本文異同から諸本の特徴を追求する。

まず、寛永十九年版と寛永二十年版である。寛永両版の版式作成の底本となった古活字版A本が現存する卷十五『法蓮抄』で確認する。

〈寛永十九年版〉畏テ誓テ云自今以後不可書外典ノ文字ヲ等ノ云云彼世親菩薩ノ

〈寛永二十年版〉畏テ誓テ云自今以後不可書外典ノ文字ヲ等ノ云云一日法華經ヲ書供養ス自シテ是我朝ニモ一日經ハ始レリ彼世親菩薩ノ

〈古活字版A本〉畏<sup>テ</sup>誓<sup>テ</sup>云自今以後不可書外典<sup>ノ</sup>文字<sup>ヲ</sup>等<sup>云</sup>／一日<sup>ニ</sup>法華經<sup>ヲ</sup>書供養<sup>ス</sup>自<sup>シテ</sup>是我朝<sup>ニモ</sup>一日<sup>ハ</sup>經<sup>ハ</sup>始<sup>レリ</sup>彼世親菩薩、  
(二十一丁オ)

改行位置を「／」で示した。寛永十九年版と二十年版では、対照すると同じ底本を用いながら多くの表記の相違が見られる。ここで取り上げたのは、寛永二十年版が底本の古活字版A本と同一表記であるのだが、寛永十九年版では、「一日に法華経を書き供養す。是れよりして我朝にも一日経は始まり」という文章が割愛されている。『法蓮抄』は身延曾存の御書で、心性日遠の頃には既に一部が欠損していたことを伝え、事実現在では五行の断簡が本圀寺に所蔵する(『日蓮聖人遺文辞典歴史篇』一〇二頁)ほか、二行や一行の断簡が各所に散在している。該当箇所の実蹟は現存せず真実は不明だが、現行の御書集に傍線の一節は割愛されている(『定本遺文』九四九頁、など)。

続いて、

〈寛永十九年版〉二常乞食三一座食四常露座五富什鹽及五味

〈寛永二十年版〉二<sup>ニ</sup>常<sup>ハ</sup>乞<sup>シ</sup>食<sup>ス</sup>三<sup>ニ</sup>一<sup>ハ</sup>座<sup>ニ</sup>食<sup>ス</sup>四<sup>ニ</sup>常<sup>ハ</sup>露<sup>ス</sup>座<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>富<sup>ハ</sup>什<sup>ニ</sup>鹽<sup>ス</sup>及<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>味<sup>ス</sup>

〈古活字版A本〉二常乞食三一座食四常露座五富什鹽及五味(二丁ウ)

という相違がある。これは、寛永十九年版は底本の古活字版A本と全く同一であるが、寛永二十年版では、「には」や「に」という語が付加されている。この相違は、寛永二十年版の特徴を如実に表している。すなわち、古活字版A本では白文体となつてゐる部分に対して、寛永二十年版では返り点や送り仮名を付して読みやすく改善を試みている。例えば、卷一の『立正安国論』は、寛永十九年版では白文体だが、寛永二十年版では返り点送り仮名が付されて読みやすくなつてゐる。卷一の古活字版A本は現存していないが、恐らく白文体であつたと思われることは、寛永十九年版における白文体の並列の様子をうかがえば納得できるのである。

このように、底本の古活字版A本に対して、寛永十九年版が変更している部分もあれば、寛永二十年版が変更しているところ

もある。また、寛永両版が揃って同一の表記に変更している場合もある。したがって、寛永十九年版も寛永二十年版も、版下を作成する際独自の対校本を用いて改訂したことが考えられるのである。それは、両版の相違からも異なった異本—恐らくは写本—であったことが想像されるのである。以上の結果から言えることは、古活字版A本の表記を寛永十九年版に求めることは、慎まなければならない。また、寛永両版における表記の変更が、真蹟に対して正確か否かの問題は、寛永十九年版の方が真蹟に近いづいている場合（例えば、卷八「如来滅後後五百歳始觀心本尊抄」）もあれば、寛永二十年版の方が真蹟に近いづいている場合（例えば、卷二十二「聖人御難事」）もあるため、「以御正本校之畢」等という註記があるから寛永二十年版の方が真蹟に近い表記であると安易に述べることが慎むべきである。各御書一編一編を対照して、明らかにされるべきである。

さて、寛永二十年版は、法華宗門書堂によって版權が買い取られ、以後寛文六年版、宝暦六年版と近世の間永続的に出版される。宝暦六年版は、「宝暦修補本」と謳われるように多数の変更が確認される。ここでは、卷三十九から三点ほど取り上げる。まず、二丁ウに見られる変更であるが、

〈寛永二十年版〉譬如有<sub>レ</sub>面有<sub>レ</sub>鏡則有<sub>二</sub>像現<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>是因<sub>レ</sub>作便有<sub>中</sub>無作<sub>上</sub>云

〈宝暦六年版〉譬如有<sub>レ</sub>面有<sub>レ</sub>鏡則有<sub>二</sub>像現<sub>一</sub>如<sub>レ</sub>是因<sub>レ</sub>作便有<sub>中</sub>無作<sub>上</sub>云

とある。寛永二十年版の場合、返り点の「下」が見当たらないが、宝暦六年版で一・二点に修正されている。

次に、二十一丁ウには、

〈寛永二十年版〉爲<sub>レ</sub>令<sub>四</sub>人<sub>ヲ</sub>知<sub>三</sub>顯教<sub>ハ</sub>勝<sub>二</sub>密教<sub>ニ</sub>也

〈宝暦六年版〉爲<sub>レ</sub>令<sub>三</sub>人<sub>ヲ</sub>知<sub>二</sub>顯教<sub>ヨリ</sub>密教勝<sub>一</sub>ル<sub>、</sub>コトヲ

という変更がある。漢字の並びを変更し、返り点を修正している。これは『戒躰即身成仏義』の一節で、真蹟が現存しないため、いずれが正しい並びなのかを判断することは不可能である。

続いて、三十六丁オであるが、



〈寛永二十年版〉サテハ冬ノ年ノ北如何カトオハシツル  
〈宝暦六年版〉サテハ冬ノ年ノ比如何カトオハシツル

とある。北を比(ころ)と修正している。このように、誤記を訂正するのが宝暦修補本の一つの特徴でもある。

以上の巻三十九における変更のように全体的に差異を確認したとき、例えば書物の巻数の変更や天皇名の変更などはあるものの、内容面の大きな変更は見られない。なお、木村中一氏は、寛永二十年版と宝暦六年版の差異を詳細に報告している〔木村〕。

#### ウ、新発見の覆寛永十九年版の表記

筆者は、刊本『録内御書』の調査の過程で、これまで言及されたことのない寛永十九年版の覆刻版を発見した。書誌学の立場より「覆寛永十九年版」と名付けた本版について、巻一『立正安国論』の対照より、同版の表記上の特徴を述べる。四点の対照を掲げる。

- ① 〈寛永十九年版〉唐武宗皇帝会昌示年  
〈寛永二十年版〉唐武宗皇帝会昌元年  
〈覆十九年版〉唐武宗皇帝会昌元年  
〈真 蹟〉唐武宗皇帝会昌元年(十四丁ウ)
- ② 〈寛永十九年版〉貴西土之仏駄  
〈寛永二十年版〉貴西土之仏陀  
〈覆十九年版〉貴西土之仏陀  
〈真 蹟〉貴西土之仏駄(十一丁ウ)
- ③ 〈寛永十九年版〉主人曰

〈寛永二十年版〉主人云

〈覆十九年版〉主人曰

〈真 蹟〉主人曰(二十二丁オ)

④ 〈寛永十九年版〉於阿鼻地獄受大苦惱

〈寛永二十年版〉於阿鼻地獄受大苦惱

〈覆十九年版〉於阿鼻地獄受大苦惱

〈真 蹟〉於阿鼻地獄受大苦惱(二十五丁オ)

それぞれを解説すると、まず①は、寛永十九年版が真蹟とは異なる「示」という表記をしていたが、寛永二十年版では真蹟と同一に変更しており、覆寛永十九年版でも同様に変更している。②は、真蹟と同一表記が寛永十九年版だが、覆寛永十九年版では誤っている寛永二十年版の表記に変更している。③は、寛永二十年版のみ変更されているが、その他は真蹟と同一表記である。

④は、全刊本が真蹟の表記と相違する事例である。

以上のように、寛永十九年版も寛永二十年版も、真蹟と相違する表記があるのだが、覆寛永十九年版も寛永十九年版や寛永二十年版の表記と同一にして、真蹟の表記と同一になったり逆に改悪されてしまったという事例も見られた。この相違は一部だが、一抄全体で確認したとき、覆寛永十九年版は版式が寛永十九年版そのままでありながら、寛永二十年版の表記に改める事例が極めて多い。もっともわかりやすい事例が、覆寛永十九年版では抄末に真蹟や日通の真蹟対校本と対照したという註記を付加していることである。こうした対照結果に基づいたとき、覆寛永十九年版が寛永十九年版の版式を用いながらも、寛永二十年版の表記を参考に改めた断言できるのである〔堀部①〕。

## エ、諸版の本文異同に関するまとめ

古活字版では、活字の同種と認められるA本とA'本には、漢文体の表記に大きな差異があった。これにB本を当てはめると、A'本と近似する一方で、A本とは相違することが判明した。A本はA'本・B本に比べ特異的な表記が目立った。しかしA本は現存数が限られており、今後の発見によってさらなる本文異同の検討が進むことを願っている。

次に、整本であるが、古活字版A'本を版式の底本としているが、寛永十九年版も寛永二十年版も、それぞれ何らかの対校本を基に、改めるべき表記を独自に改めていることが判明した。また、寛永二十年版には正本や日通の真蹟対校本と対照したという註記がある御書が多数あるものの、その表記が必ずしも真蹟と同一になったわけではない。

寛永十九年版の後継となる覆寛永十九年版では、独自に表記を改めているが、寛永二十年版を基に大きく表記を改めていることを紹介した。また、寛永二十年版の後継となる宝暦六年版では、文字の修正が行われていることも紹介した。

以上示したように、刊本の諸版において本文異同が認められ、それぞれの版に特徴があることも簡単ながら紹介してきた。

科学的な研究方法が移入された近代以降、御書は真蹟の存不在が主体となつて真偽判断がなされてきたが、近年では内容的に判断して用いるべきという方向性に変化しつつある。そのような過程の中で、御書の諸版に本文異同があることは、少なからず認識していかなければならない。

とはいえ、例えば『万葉集』や『源氏物語』などといった、奈良時代や平安時代に成立した書籍は、長い期間の写本伝承による展開から大きな本文異同が認められ、それによって写本の系統立てを検討することができる。一方、御書は日蓮聖人滅後以来近世までのおよそ三百年程度の期間が写本伝承の中心であるから、その間に展開した本文異同は、他の古典と比較するとそれ程大きな差異は考えられないと言えるだろう。諸本間の系統を検討するほどグループ分けできるような大きな異同を期待することはできない。小さな相違の中から、少しずつ検討するしかない。もう一つは、抄毎によってグループが相違することも考えられる。刊本はこれにあたる。したがって、総合的な視座より系統立てをすることが求められるのである。

## おわりに

以上、近世における御書に関する書籍の出版について述べてきた。紙数の都合上、提示した内容は限られてしまったが、ひとまず本稿で述べた内容を簡潔にまとめておきたい。

まず近世初期は、古活字版や整版の度重なる出版事情から、『録内御書』が重視されていたことが判明する。時代の経過により、『録外御書』も出版される。そして、近世後期になると、録内・録外の種別から、目次が出版され、次第に編年体による見方が主流となる。そして、御書の出版も編纂方法が編年体に変化して、小川泰堂の『高祖遺文録』の出版を見、近代の御書集へと展開するのである。

また、御書のテキストも録内・録外というまとまったものが出版されるだけでなく、要文集が早い段階から出版され、近世では数点の要文集が出版されたことも判明した。さらには、注釈書も出版される。『録外御書』に対するものもあるが、主体となるのは『録内御書』であり、また個別の御書の注釈もあるが、『立正安国論』が多く、やはり『録内御書』が中心となっている事情も判明した。ただし、個別のテキストの中で、『十王讚歎抄』が比較的早い段階で出版されたほか、録外に属する御書がいくつか個別に出版された事情も確認できた。

このように、近世に出版された書籍の整理により、門下における時期的な『御書』への対応方法が確認できた。出版と御書という視点より、近世初期の古活字版の出版と日蓮門下の関わり、出版された書籍と日蓮門下の対応など、出版史と日蓮門下の関係性は、極めて重要な研究課題と指摘したい。

この他、御書が各版において表記に相違があることも指摘した。御書の真偽問題、そこには表記の問題も大きく関わるが、そうした課題は日蓮門下にあつては永遠の課題である。そのためにも近世を含めた書誌学的研究は重要な仕事であることを改めて認識、提唱したい。筆者も、引き続きこうした課題に真摯に向き合っていきたい。

参考文献 本文の「」に対応する。(発表年代順)

- ・川瀬一馬『増補古活字版の研究』(一九六七年、日本古籍籍商協会刊)
- ・冠賢一①『近世日蓮宗出版史研究』(一九八三年、平楽寺書店刊)
- ・冠賢一②『寛永二十年本『録内御書』の刊行とその特色』(浅井円道先生古稀記念論文集『日蓮教学の諸問題』所収、一九九七年、平楽寺書店刊)
- ・竹下義人『整版』(『日本古典籍書誌学辞典』所収、一九九九年、岩波書店刊)
- ・富士昭雄『覆刻本』(『日本古典籍書誌学辞典』所収、一九九九年、岩波書店刊)
- ・大内田貞郎『古活字版』(『日本歴史大事典』二卷所収、二〇〇〇年、小学館刊)
- ・木村中一『近世刊本『録内御書』の書誌学的研究』(『大学院年報』二〇号所収、二〇〇二年)
- ・池田令道『古活字版録内御書についての覚書』(『興風』一四号所収、二〇〇二年)
- ・堀川貴司『書誌学入門』(二〇一〇年、勉誠出版刊)
- ・「史料紹介(37) 御書五大部百部刷本観心本尊抄(東京都港区圓真寺)」(『日蓮教学研究所紀要』三九号所収、二〇一一年)
- ・小秋元段『古活字版の起源とキリシタン版』(豊島正之編『キリシタンと出版』所収、二〇一三年、八木書店刊)
- ・佐々木孝浩『キリシタン版国字本の造本について』(『斯道文庫論集』五一号所収、二〇一六年)
- ・松岡正次『十王讚嘆抄』の伝来に関する一考察』(『印度学仏教学研究』六五卷一号所収、二〇一六年)
- ・堀部正円論文
- ①「新発見の「覆寛永十九年版録内御書」について」(『日蓮正宗教学研究所紀要』一号所収、二〇一四年)
- ②「『御書和語式』考―その異本表記をめぐって」(『日蓮正宗教学研究所紀要』二号所収、二〇一五年)
- ③「近世刊本『録内御書』の系譜をめぐって」(『法教学報』二二号所収、二〇一五年)
- ④「本国寺版をめぐる諸問題―『録内御書』を視点として」(『近世文藝』一〇四号所収、二〇一六年)
- ⑤「古活字版B本『録内御書』に関する書誌的覚書」(『書籍文化史』一八号所収、二〇一七年)
- ⑥「古活字版A種本『録内御書』の書誌学的考察―最新の知見を踏まえて」(『東海仏教』六二輯所収、二〇一七年)
- ⑦「円智院日性撰『御書註』の特徴―他の著述との比較を通して」(『日本宗教文化史研究』二三卷一号所収、二〇一八年)

【付記】

本稿は、平成二十九年九月十七日、東京大学において開催された第七十六回日本宗教学会学術大会のパネルディスカッション「日蓮遺文の編纂と刊行」で「近世における『御書』出版の展開」と題して発表した内容に、加筆修正したものである。パネルの構成員の先生方には、開催当日に至るまで種々ご指導をいただいた。とりわけ代表の三輪是法先生には、発表に対して『宗教研究』九一巻別冊(二〇一八年)にコメントをお寄せいただいた。記して学恩に深謝したい。また、当日ご質問、ご指導いただいた諸先生方にも、この場をお借りして御礼申し上げます。

